

国における「東アジア文化の記号」となる人物を探ることができ、また『アジア文化』誌で集中的に掘りさげていくこともできるだろう。

第二に、アジア文化の伝統の中からは多くの貴重な遺産を見いだすことができるという点である。先日、新型コロナウイルスが全世界で猛威を振るう中、「中国文化における難局でのいたわりの心と苦悩の意識」をテーマとする研究会に参加することがあった。この研究会にむけての準備をする中で中国には古今を通じて様々な知識人たちが、それも「良知」を土台として、時には自らの命を危険に冒してでも難局においていたわりの心と苦悩の意識を持ち続けていたことに気づかされた。これはまことに得がたい精神的特質である。また、韓国についても同様の人物をすぐに見いだすことができた。恐らくは日本史を見ても同様に、「難局でのいたわりと苦悩の意識」を持っていた知識人は少なくないだろうと考えられる。

これがアジア文化、特に東アジア文化の伝統において共通の特筆すべき精神的特質なのである。『アジア文化』誌ではこのようなアジア共通の優れた精神性を持つ研究成果を多く掲載すべきであり、これこそが非常に良い方法であると考えられる。

第三には、近年、アジアの新文化圏において素晴らしい文化人や新たなる文化的現象が次々と出てきている点である。韓国を例にすれば映画『パラサイト半地下の家族』や音楽グループBTSの国際的な成功があり、また、中国や日本も早く

から優れた成功例があるだろう。文学方面で見れば、日本の川端康成や大江健三郎、中国の莫言や閻連科、韓国にも黄皙映や韓江といった人たちは国際的に傑出した成果を出しているが、私の個人的な感覚では世界の文壇においてアジア文学共通の声ともいえるべき成果はさして多くはないように思える。

この点から言っても、同じアジア文化を背景とする知識人として、アジア文学または東アジア文学を一つのまとまりとしてアジア文学・東アジア文学の声としてまとめていく運動を提唱し、かつ盛り上げていくべきではないだろうか。そうすることで世界文学での「話語権」を強めることができるのである。こうした視点から見ると、韓国文化芸術委員会（ARKO）と大山文化財団、中国作家協会、そして日本の大江健三郎が推薦する若い作家達の団体による三カ国による国際協力、つまりは2008年から二、三年ごとに開催されている「韓中日東アジア文学フォーラム」はまことにもって意義のある活動であると言えよう。

最後に、『アジア文化』創刊者の先見の明と編集委員の労苦と努力に対し心からの敬意と謝意を表するとともに、『アジア文化』誌がアジアの文化にとって本当の意味で意義ある発展をし続け、また貢献の大なるを願うものである。

2020年12月24日 ソウル樹人齋にて記す  
(勤務先：韓国外国語大学教授)  
(訳者：浙江越秀外国語学院)